

付録 2012年度「身体文化学演習」の記録

シラバス これをなぜか近鉄桃山御陵前駅のベンチで書いていた記憶が・・・

講義コード:2073590/**開設科目名:**身体文化学演習/**担当教員:**鈴木康史/**単位数:**2/**対象学生:**2回生以上/**開講期・曜日・時限・教室:**後期 火曜日 5・6時限 F501

授業の概要: 3・11の大災害によって、われわれは「文化」「カルチャー」と呼ばれる領域の無力さを思い知らされた。しかしそれは、平時であれば「文化」「カルチャー」は何か役に立つということの意味するのではなく、われわれはそうした役に立たないものを営々と積み重ねてきているに過ぎないということがたまたま露呈しただけなのである。実際、災害がなくとも、先行きの見えない社会状況において、経済上の理由から「文化」が切り捨てられるという事態も発生している。

本年度は、こうした状況において、「文化学」の原点に立ちかえり、「いま文化に何ができるか」を統一テーマにし、各自による報告、討論を行う。テキストとして、磯部涼『プロジェクト FUKUSHIMA 2011/3.11-8.15 いま文化に何ができるか』を使用する。これを読み、各自が様々な方向へと調査、議論を展開し、それを教室に持ち寄ってディスカッションを行いたい。具体的なテーマ例は「授業計画」欄を参照してほしい。

学習・教育目標:長引く不況や財政難、少子高齢化などの問題を抱え、さらに3・11を経験し、日本が新しい段階に入らないうちで、「文化」「カルチャー」という領域が問い直されようとしている。「文化」とは何であったのか、「文化」には何ができるのか、さらに「文化」を学ぶとはいかなる営みなのかについて、各自でテーマを立てて調査報告し（問題発見～解決能力）、ディスカッションを行う（コミュニケーション・スキル）。

10月2日 第1回

ガイダンス。20人を超える出席に驚いた。授業の趣旨を説明。一回発表してそれで終わりというような授業にはしない。授業として何か成果を形にしたい。が、まだ何も決まっていなくて、成果のまとめ方も含めてみんなでアイデア出しあって欲しい、ということ。何を配ればいいのかもよくわからなかったのと、とりあえずE.M.フォースターの「私の信条」（『民主主義に万歳二唱』より）と、『プロジェクト FUKUSHIMA』の「はじめに」の抜粋を配布して読ませる。和合亮一氏の講演会を開催し授業と連動させる予定であった。（がこれは年度を持ち越すことに。）

10月9日 第2回

各自の希望テーマを調査。これからの授業の進め方について話す。

（小川伸彦先生に相談に乗っていただいた、この形に落ち着いた。感謝!!）

①次週に班分けすること

②各班で議論をすること。司会、書記を回り持ちで。会議録をちゃんと取って鈴木に送ること。全体の授業も大学院生が記録を取ること。（なおこれらの記録はコピーして次の時間に配布。全員、もしくは班メンバーで共有させた。）

③前半45分：各班のミーティング、後半45分：全体でその報告とコメント

④10月中旬に「問題」を発見する

拙論「日本近代の震災と娯楽—文化に何ができるのか」（『大学の現場で震災を考える』所収）を論文の例として配布。が、まだどう進んで行くのかは未定。

10月16日 第3回 資料編参照⇒【資料①】学生による授業記録
先週書かせた希望テーマを見て4つに班分けを行う。最終形とだいぶ違う。

①身体文化班/②音楽班/③伝統文化班/④エンターテインメント班

授業は、予告通り前後半形式。前半に各班で話し合ったことを、後半に各班10分で話してもらってコメントをするが到底時間が足りない。文科省「最近の情勢と今後の文化政策(提言)」を紹介。お役所の文章の紹介として。

10月23日 第4回 資料編参照⇒【資料②】各班の話し合いの記録

前後半形式の授業。「最終的にどのような形でまとめるのか、文章にするのか、グループ発表なのか、個人かは全く決めていない。それ自体を自分たちで決めてほしい。例えば本を出すとき、出版社が飛びつきそうなアイデアは出ない?とにかく今日は、いろんな視点を出そう。」というコメントをしているので、またアイデアが出そろっていなかったのだろう。そろそろ「問い」を立てる期限である。

10月30日 第5回 資料編参照⇒【資料③】授業直前に流したメール

前後半形式の授業。2日前に全員にメールを流す。この一斉送信は「身体文化学演習インフォ」というタイトルで統一して以後活用した。徐々に各自が調べるテーマが決まり始めてきたのだろう、個別相談がどんどんと入り始める。このあたりで、本格的な論文集が出来そうだという感触をつかみ、班編成を変えることも考え始める。

11月6日 第6回 資料編参照⇒【資料④】配布プリント「企画書」

学生たちのテーマが大体決まったので、班の編成を変えて、本格的な論文集を作ることに決定。ようやくこの本の姿が浮かび上がる。人数の都合で院生には無理をお願いした。

①マンガ班/②パフォーマー班/③マスメディア班/④フクシマ班/⑤文化行政班

論文集の「企画書」と銘打った資料を配布。同時に「論文」の書き方を一から教えねばならないことに気付く。先行研究読んで、資料集めて、CiNi知ってる?そもそも「論文」って何?このあたりから「文化に何ができるのか」よりも、学生たちの「卒論の練習」という意味合いが濃くなる。各班ごとに相談に来るようにアナウンス。

11月13日 第7回 資料編参照⇒【資料⑤】各班の話し合いの記録
カゼで休講。一斉送信で連絡し、各班での議論。

11月20日 第8回 資料編参照⇒【資料⑥】各班発表用レジュメ
各班の進捗状況発表。各人のテーマと分担が少しづつ見えてきたようだ、

11月24日 番外編

急遽国会図書館関西館へ学生たちを引き連れてゆく。資料が見つかりません(≠どうしているかわかりません)という質問が相次いだため。学生のコラム参照。

11月27日 第9回 はベトナム出張で休講。各班で議論していたのだろう。

12月4日 第10回 資料編参照⇒【資料⑦】各班発表用レジュメ

各班の進捗状況報告。各人のテーマが決定して、そろそろ授業が要らなくなってくるので、いご、はじめに少し必要なことを話して、あとは班/個人相談という形に。

12月11日 第11回

記録なし。たぶん自習/質問日。何人かの2回生が相談に来た覚えが。

12月18日 第12回

自習/質問日としていたが、集合させて以下のことを話して早めに解散。

- ① 学術論文の構造 「はじめに」「おわりに」構造、注がある
- ② 「はじめに」の重要性 (いくつかの論文の「はじめに」を配布)
 - (1) そこでその論文が何を語ろうとしているのかを示すもの (つかみ)
 - (2) なぜこのネタなのか、どのような視点/方法なのかを語る
 - (3) 執筆中は自分が何を書こうとしているのかの整理にもなる (重要)
とりあえず「はじめに」を書いてみる
→何を書こうとしているのかが見える＝仮説が立つ
→実際に書きはじめると不都合が出てくる
→「はじめに」に戻って書き直す＝頭の整理をし直す
→これを繰り返す

これをうけて「はじめに」を書いてくることを冬休みの宿題に。授業後に思いついて一斉送信したので学生たちは面食らっただろうが、これをしなければこの論文集は出来あがっていなかっただろう。

1月8日 第13回

出してきた全員の「はじめに」を印刷して全員に配布。お互いに参考になったようだ。もう一度「はじめに」の重要性について語る。早い学生は、このあたりですでに第一稿が出てきている。

1月29日 第14回

この日に早めに出来上がったある学生の論文を配布。みんな大いに参考にしたようだ。これがなければこの論文集は出来あがっていなかっただろう(再)。その後、学術論文の書き方の心得を話して、あとは個別相談。

- ① 論文とは自分が何が面白かったのかを人に伝えるもの。何が疑問で、何がわからなくて、それがこんな風に解決しました!!ということ論理的に書くもの。
- ② 「事実」を述べる部分は「自分」を出さない。そこは「客観性」が大事。そうした「事実」をどうつなげてゆくのが「自分」。議論の「形式」で自分が出る。
- ③ 「しかし」を使う・・・などなど

2月5日 第15回 資料編参照⇒【資料⑧】配布プリント

授業としては最終回。今後の予定確認。編集委員を募集。

その後

授業終了後が本番。2月いっぱい毎日相談に乗り、毎日真っ赤になるまで添削をしていた、そんな記憶しか残っていない。卒論の指導とそれほど変わらないことを20人相手にやったわけだ。

「はじめに」で、学生たちの不断の努力を引き出すためにはどうすればいいか、などと書いたが、その答えは簡単でこちらが手間をかければいいという単純な話なのである。だが、「斬新な解釈/発想をする」「論理的である」「他者にわからせる文章を書く」、おそらくこの三つを教えるのは、個別具体的なテーマで調べさせ、考えさせ、それを文章化させてゆく中でしか無理、つまりは個人指導しかないのだろうと、そんな気がしている。

鈴木康史記